

厚生労働科学研究費補助金（第3次対がん総合戦略研究事業）
（分担）研究報告書

中学校におけるがん教育の実践に関する研究

研究分担者 中川恵一 東京大学大学院医学系研究科 放射線治療学分野 准教授

研究要旨：
中学校におけるがん教育の実践を通して、学校でのがん教育のあり方について提言を行う。

A. 研究目的

国民の2人に1人ががんになる時代にもかかわらず、がん検診受診率が2割程度に留まり、先進国のなかでもわが国のみ、がん死亡数が増え続けている。がんに関する知識の普及は政策的にも喫緊の課題であるが、日本は先進諸国の中でも圧倒的にがんについての教育が遅れており、この問題を解消するに当たっては義務教育期間中からがん教育を行うことがきわめて重要と考えられる。

しかし、これまで、学校でのがん教育のあり方については、一定の共通見解がなかった。本研究では、学校でのがん教育のあり方について検討し、提言する。

B. 研究方法

全国10校、約1300名の中学2年生を対象に、がん教育を行い、事前、事後、さらに6ヶ月の教育効果を通して、がん教育の必要性と教授する内容について、提案を行った。

C. 研究成果

学校教育においては、生涯を通じて自らの健康を適切に管理し改善していく資質や能力を育成することが重要である。近年、

疾病構造の変化や高齢社会の到来など、子供たちを取り巻く社会環境が大きく変化してきている。特に、日本人の死亡原因の1位であるがんについて、子供たちが適切に理解し、行動することができるようにすることが課題となっている。

このため、学校全体で共通理解を図りつつ、体育科、保健体育科などの関連する教科、特別活動等において、発達の段階を踏まえ、がんの基礎的知識やその予防などに関する知識を確実に身に付けること、生命の尊重や自己及び他者の個性を尊重するとともに、相手を思いやり、望ましい人間関係を構築することなどを重視し、相互に関連付けて指導することが重要である。

具体的には、以下の事項を理解させる必要がある。

がんとは（発生要因）：がんとは、体の中で、異常な細胞が際限なく増えてしまう病気である。病気が進むと、元気な生活ができなくなったり、命を失ったりすることもある。たばこ、ウイルス、飲酒、細菌、偏った食事、運動不足、肥満、持って生まれた素質など、多様な原因がある。

疫学：がんは、日本人の死因の第1位で、現在では、年間約36万人の国民

が、がんで亡くなっている。その背景には、社会の高齢化がある。また、生涯のうちにがんにかかる可能性は、男性の58%、女性の43%とされているが、年々増え続けている。

予防：がんになるリスクを減らすための工夫。たばこを吸わない、規則正しい生活とバランスのとれた食事をする、ワクチンを受けるなどの方法がある。

早期発見：早くに見つけて治療を受ければ多くのがんは治すことができる。早くにがんを見つけるために検診を受ける。

検診：がんを早期に発見するための検査。日本では、肺がん、胃がん、乳がん、子宮頸がん、大腸がん、などの検診が行われている。

治療（手術、放射線、抗がん剤）：がんになっても、全体で半分以上、多くの早期がんは9割近くが治る。がん治療の3つの柱は手術、放射線、抗がん剤。ほとんどのがんの場合、完治の手段は手術か放射線治療だが、抗がん剤（飲み薬や点滴）をふくめて、組み合わせることが多い。治療法は自分で選ぶ時代になっている。

緩和ケア：がんになったことで起こる痛みや心のつらさなどの症状を和らげ、通常の生活ができるようになるための治療。治癒しない場合も心身の苦痛を取るための医療が行われる。

生活の質：がんの治療後は、様々な不調を抱える人もいれば、元気な生活に戻れる人もいるが、できるだけ、今までどおりの生活ができるように“生活の質”を大切にすることが重要である。がんになっても充実した生き方ができる。

共生：がんは誰もがなる可能性のある病気なので、がんを差別することなく、

がんと共に生きることが大切である。

D. 考察

安倍総理も、国会で「がん教育の全国展開を推進する」と答弁したように、今後、がん教育の普及が期待されている。そのなかで、がん教育のあり方や内容についての指針が必要となるため、本研究の成果は重要である。

なお、「がんを学ぶ」「いのちの大切さについて考える」の2つの事項が「がん教育」の根幹であり、両者が適切に実施されることで「がん教育」の目的が達成できると考えられる。

E. 結論

学童向けのがん教育のあり方、内容についての指針を提案した。

F. 研究発表

1. 論文

Nakagawa K, Haga A, Sakumi A, Yamashita H, Igaki H, Shiraki T, Ohtomo K, Iwai Y, Yoda K. Impact of flattening-filter-free techniques on delivery time for lung stereotactic volumetric modulated arc therapy and image quality of concurrent kilovoltage cone-beam computed tomography: a preliminary phantom study. J Radiat Res. 2013 Aug 26. [Epub head of print] PubMed PMID: 23979078.

Yamashita H, Omori M, Okuma K, Kobayashi R, Igaki H, Nakagawa K.

Longitudinal Assessments of Quality of Life and Late Toxicities Before and After Definitive Chemoradiation for Esophageal Cancer. Jpn J Clin Oncol. 2013 Nov 11. [Epub ahead of print]

Igaki H, Onishi H, Nakagawa K, Dokiya T,

Nemoto K, Shigematsu N, Nishimura Y,
Hiraoka M; Japanese Society for Therapeutic
Radiology and Oncology Health Insurance
Committee.

A Newly Introduced Comprehensive
Consultation fee in the National Health
Insurance System in Japan: A Promotive Effect
of Multidisciplinary Medical Care in the Field
of Radiation Oncology--Results from a
Questionnaire Survey.

Jpn J Clin Oncol. 2013 Dec;43(12):1233-1237.

大倉孝之, 伊藤広貴, 越塚誠一, 野元昭弘,
芳賀昭弘, 中川恵一

"胸郭運動を考慮した横隔膜の運動モデル"

Medical Imaging Technology **31**(3),

189-197 (2013)

2. 学会発表

1)再発・転移症例における緩和的肺定位照射-大熊加恵、山下英臣、中川恵一、第72回日本医学放射線学会総会、2013年4月11～14日、横濱

2)肺がんVMAT-SRTにおける呼吸抑制再現性の検証-中川恵一、芳賀昭弘、木田智士、増谷佳孝、山下英臣、高橋渉、作美明、早乙女直也、白木尚、大友邦、日本放射線腫瘍学会第26回学術大会、2013年10月18～20日、青森

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
なし

2. 実用新案登録
なし

3. その他